龍灯

第　73　号

発行所　大阪市史跡 龍渓禅師墓所　霊亀山 九品院
〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725　FAX 06(6583)0908

発行者　第廿五代住職　奥田啓知（智證）

当院は、阪神なんば線で、なんばから7分です。

『やられたら、やり返す。倍返しだ！』

～怨みは捨ててこそ止む（法句経）～

「やられたら、やり返す。倍返しだ！」テレビドラマ『半沢直樹』で、俳優の堺雅人さんが演じる大手銀行員が次々と降りかかる困難に立ち向かう物語で、半沢の決めゼリフ「倍返しだ！」は、一躍流行語となりました。

日本では、昔から「やられたらやり返す」報復・仇討ちは美徳とされてきました。赤穂浪士の吉良邸討ち入り、その他数多くの仇討ちは、『忠臣蔵』をはじめ数多く、芝居や映画になっています。

『旧約聖書』の「レビ記」には「目には目を、歯には歯を」と言う言葉がでてきます。現在でもイスラム国の法律には「キサース（報復の意味）」と呼んで「目には目を」を認めていますが、それは「同害報復」を認めたものであり、「拡大報復」は禁じています。しかも、なるべくその権利を行使せずに相手を賠償金で赦してやれと勧めてもいます。

私たちは、日常生活においてしばしば「やられたら、やり返したい」気持ちにかられることがあります。道を歩いていてぶつかられたからといって、相手に殴る蹴るの乱暴を働く者も時にはいます。それこそ「倍返し」どころか「百倍返し」と、怒りには際限がないのです。

だから、イスラム教では怒りを認めたうえで、「同害報復」を認め、「拡大報復」を認めないのです。仏教では、絶対に「報復」は賛美しません。

浄土宗の開祖の法然上人は、九歳の時、美作国の押領使（警察の長官）をしていた父親の漆間時国が夜討ちにあって落命しました。時国は、死に臨んで上人に遺言しました「敵を怨むな、わしが殺されたのは、前世の因縁であって、おまえがわしの仇を討つならば、相手もこちらを仇とつけねらうだろう。それでは怨みの尽きるときがない。お前は出家して、わたしの菩提を弔ってくれ」とこの言葉によって、法然上人は、その後の一生を決めたといいます。

法句経には、「この世において、怨みに報いるに怨みをもってすれば、ついに怨みの息むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である」とあります。法然の選んだ道こそ、真に怨みを無くす道だったのです。

「倍返し」どころか「報復」さえしないのが、仏教の教えなのです。サンフランシスコの講和会議で、セイロンの首席全権が『法句経』のこの言葉を引用して、日本人の戦争責任に対する怨しの言葉をのべてくれました。どこかの国とはちがいますね。

波濤の夢

（龍渓禅師一代記）その十四

～龍渓と隠元禅師⑩～

龍渓禅師の遺偈

遺偈とは、遺偈偈頌の略。高僧碩徳が入滅に際して、後人のために遺す偈のことで、そこには大悟の境涯、または、心境感想等が、辞世の語として書かれたもの（禅学大辞典）である。龍渓の遺偈について見てみると、

三十年前の恨み、未だ消せず
幾回か屈を受く、爛藤条
今晨怒気　人に向って喫す
喝一喝
却倒す胥江　八月の潮

とあるが、三十年とは、ただ漠然とした長い年月を言われたにすぎないが、弊師の弘忠和尚は、紫衣事件の契機となった「大徳妙心諸法度」の「三十年修行」に引っかけ、「三十年」を持ち出したのではと言う。『妙心寺史』の著者川上孤山師は、約三十年前の寛永十八年（一六四一）龍渓の師匠の伯蒲慧稜の十三回忌のことだとする。この法要には、妙心寺からは、龍渓の属する霊雲派以外の他の三派は一寺も出頭しなかった。この年の春に幕府は紫衣禁圧政策を廃止したが、妙心寺内紛が公然化し、龍渓はこのことを恨みとして、鬱鬱の生活を送ったという。

いずれにしても、龍渓が末期に際して、今なお脳裏に浮かぶのは『紫衣事件』で、当時の先輩たちの狼狽を目の当たりにし、また度重なる批難や誤解を受け（幾回か屈を受く）ても、臨済正法、ひいては仏法興隆の為ひたすら生きぬき、ぼろぼろになった龍渓自身（爛藤の杖）である。

条とは杖（印可証明）のことで、信念をもってたじることなく生きぬき、隠元禅師より臨済正宗の正法をついだ誇りも垣間見れる。そうした長年の恨み（懐旧の情念）を起承句で述べている。

転句の「怒気」について、弊師は自著「龍燈」のなかで、「怒気」という一語は「屈」に対しての「恨」と同じで、不惜身命、求道の一途に燃え続けた禅師としては、まさに憂国の志士とでも申すべきで、激凜たる護法の道念が『怒気』となって、「人に向かって」水ふき（喫）かけ、最後の警告の一句となったものであるとみるべきだとしている。

古田紹欽氏は自著『遺偈の書』のなかで「喫」は水などを吐きかける意味であり、今朝またもや襲いかかる怒気それは龍渓にとって最後の受屈となるものであろう。そこで喝一喝したという

胥江の胥は春秋時代の楚の人・伍子胥を指す。子胥が濤神となったという故事から濤の逆巻く川をいうと述べている。

平成十年十月に、妙心寺塔頭「霊雲院」での拙院修養会で、禅学者の京都大学名誉教授柳田聖山先生は、史記巻六十六話の伍子胥列伝第六を紹介された。

骨肉争う凄まじい怨念を、当代随一の知識人で中国文学への造詣が深い龍渓が、自己の恨み（憶い）の深さを伍子胥になぞらえ、銭塘江の海嘯といって、毎年旧暦の八月十八日前後に、海水の大逆流（大津波）が押し寄せるが当時はその激流に船漕ぎだすことが、男子として最高の栄誉とされた。

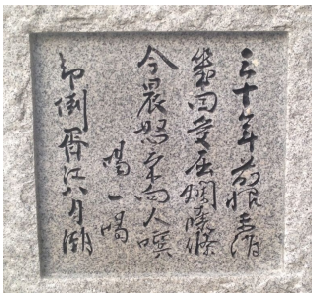
今まさに押し寄せようとする大津波を銭塘胥の海嘯ととらえ、この襲いかかる怒気、龍渓にとっての最後の受屈というものを、おし返してその激流にのって、臨済正法の本場、隠元の故郷中国に渡ってやるわいとする気持ちが読み取れるのではと言われた。

従って、龍渓の遺偈は意訳を試みると、紫衣事件以降、長い年月の恨み（臨済正法興隆、ひいては仏法興隆の憶い）は消えていない。幾度も、屈（批難、誤解）をうけてきた私だが今憶いの丈（怒り）の一喝を児孫に向かって吐きだす。喝一喝（カーッ）。逆巻く胥江八月の潮を押し返し、禅の本場中国へ渡ってやる。と自分なりに解釈できる。

龍渓の水定示寂は、妙心寺では『関山濤』と称して、妙心寺開山の関山慧元の冥罰だと喧伝したという。

しかし龍渓の最後は、天災とはいえのがれることが不可能でなかったにもかかわらず、自ら死を選ぶ劇的な最後であった。それは、天命の怒りのもと、過去の恨みは消え失せ、胥江八月の潮を押し倒し、生死を超越して正に涅槃寂静・涅槃妙心の境涯にあったものといえる。

（つづく）



龍渓禅師の遺偈

だるまさん、集めてます。ご不要なだるまさん（置物など）お寺へ譲ってください。

墓地維持費のご納付をお願いします。墓参りの折、郵便振込みでも結構です。

檀信徒の皆さまへ

第十九回　修養会報告

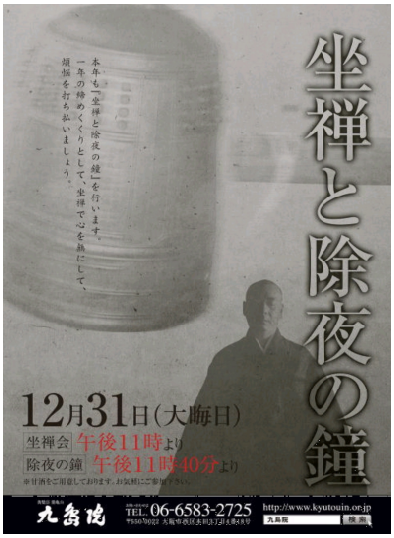
開催日　十一月二日(土)
天気　晴れのち曇り
参加者三十七名

大阪市内の黄檗宗寺院　瑞龍寺を拝搭し、中村秀晴老師の法話を拝聴。徒歩にて移動し、貸切クルーズで水都大阪をたっぷりと満喫しました。今回は、例年と違い電車での短時間のツアーでした。

来年以降は未定ですが、今回のように檀信徒の皆様と楽しいひと時を過ごしたいと考えていますので、たくさんのご参加をお待ちしています。（副住職）

坐禅と除夜の鐘

恒例となりました、
『坐禅と除夜の鐘』を行います。
12月31日(大晦日)
坐禅　午後11時
除夜の鐘　午後11時40分



行事報告

8/19　水灯会(お施餓鬼法要)　参加者40名
8/22　地蔵盆子ども会　参加者70名
8/23　大亀地蔵尊　地蔵盆回向　参加者10名
9/28　写経会　参加者6名
10/26　お寺deヨガ　参加者8名

行事予定

12/31　坐禅と除夜の鐘
2/11　写経と精進料理の夕べ（主催：大阪市仏教青年会）四天王寺客殿を利用しての写経会です。参加費三千円。
3/23　山門会（春のお彼岸法要）
4月　花まつりヨガ(予定)　詳細は、次号にて。
4/8　花まつり甘茶接待(西区仏教会)　九条駅前での花まつり甘茶接待。

九条から阪神三宮駅・近鉄奈良駅まで直通電車が走ってます！

平成26年　年忌早見表

年忌	寂年	年忌	寂年
1周忌	平成25年	17回忌	平成10年
3回忌	平成24年	25回忌	平成2年
7回忌	平成20年	33回忌	昭和57年
13回忌	平成14年	50回忌	昭和40年

☆1000年都市、京都おもてなし音絵巻☆
～東日本復興チャリティー～　クラシックコンサート

2013年12月8日(日)　京都コンサートホールにて行われるクラシックコンサートに黄檗宗僧侶が声明を披露することになりました。滅多とない機会です。ご興味ある方はチケットをお求めください。
日　時：2013年12月8日(日)　15:00開場　16:00開演
会　場：京都コンサートホール 大ホール
出演者：秋川雅史　河村隆一　ボブ佐久間など。
チケット料金：前売／SS席￥8,000　S席￥7,000　A席￥6,000

facebook (フェイスブック)はじめました。ご覧ください。

墓地維持費のご納付をお願いします。墓参りの折、郵便振込みでも結構です。

奉納便り

○金壱拾萬円御寄進（平成廿五年九月廿六日）

佐伯淑子様より、ご先祖供養にとご喜捨を頂きました。厚く御礼申し上げます。放生池の浄化装置の改修新設工事費用の一部に使わせて頂きました。新しく鯉を放しましたので、墓参や参詣の際にご覧ください。

編集後記

▼今春の『だるま堂』落慶記念に製作した日本手拭いは、とても好評でした。「ころがせ転がせまだ角がある」と小生の墨書に添えた『だるまの絵』は、檀家の鈴木房子さんの姉鶴子さんの亡きご主人隅谷昌造氏の書かれたものです。

▼なかには額縁にして飾っておられるお家もありました。年齢を重ねても、なかなか角がとれませんね。

▼来年は午年です。小生、馬齢を重ねて新年は、齢六十三になります。

▼『馬に乗ってみよ、人には添うてみよ』という諺があります。馬には実際に乗ってみなければ、その良し悪しが判らない。人間も実際に付き合ってみなければ本当の事が判らない。新年は、虚心坦懐に色々なご縁を頂ければと祈念しています。

（住職　記す）

☆修養会翌日に参加した淀川市民マラソンでは、残念ながら4時間を切ることが出来ませんでした。☆結果は4時間7分。30キロ以降足が痛くなり、ペースダウン。先を走っていた先輩が待っていて、励ましてくれながら一緒にゴールしました。ひとりだとゴールまでにもっと時間がかかっていたはず。人の支えで、不可能が可能になると実感できました。（副住職記す）

●　骨　壺　●

秋彼岸明けの翌朝、日課の３匹の飼い犬の散歩に出たら、お寺の駐車場のフェンスの前に、骨壺が置かれていました。けったいな落とし物？に、わざと電車の網棚に骨壺を忘れる人がいると何かで聞いたような記憶が脳裏に浮かびました。「散歩の途中にある交番所で聞いたら」との家内の意見で、そのままにして散歩に出ました。

お巡りさんは、遺失物として届けてくれれば、処理しますとのことで、遺失物ならぬ遺失仏を、本堂で供養してから届けようと、骨壺の中を検（あらた）めると、遺骨はなく、百円硬貨が一枚入っていました。「遺骨をどこかで散骨し骨壺の処分に困り、お寺の門前に捨てたのでは？」と家内は言いました。近頃流行りの『散骨業者』なら、骨壺は処分してくれるはず、自分で勝手に捨てたのかな…。いろいろと憶測をめぐらせました。

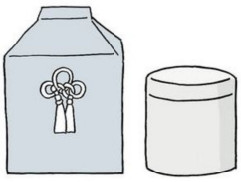
フィリピンの戦没者慰霊ツアーで、見聞しましたが、戦地の日本軍の慰霊碑は骨壺の形にしています。日本人ほど遺骨に執着する国民はないとか、ハワイの真珠湾に沈没した戦艦アリゾナは数多くの戦死者を乗せたまま、戦艦自体が慰霊碑となっています。

日本人のお墓に対する感覚も随分変わってきました。少子化に伴う所帯数の激減の中、お墓を護ることの難しさから、永代供養合祀墓や樹木の根元に遺骨を埋葬し墓碑は建てない樹木葬などが流行っています。その先駆けとなったのが「散骨」です。

「散骨」といっても、遺骨を砕いて「違灰」にして撒（ま）かねばなりませんが、「供養」のひとつもしてこそ「功徳」になりますが、ただ「散骨」しただけでは、遺骨を捨てたと同じで、故人も浮かばれないと思います。

「私のお墓の前で泣かないで下さい～」の『千の風』の歌がこんな情けない風潮を助長しているのでは・・。

危惧しているのは、お寺さんだけなのでしょうか。



お知らせ

◎のぼり奉納の募集◎

１旗　金２千円

『南無観世音菩薩のぼり』を入れ替えます。一年間境内に掲げます。昨年同様、お施主さんを募集いたします。為書きと施主名を墨書します。

ご希望の方は、寺務所まで、お声をかけてください。

だるまさん、集めてます。ご不要なだるまさん（置物など）お寺へ譲ってください。